

中大兄皇子と中臣鎌足と蘇我入鹿

中臣鎌足 「中臣鎌足ですう、そしてこちらが」

中大兄皇子 「中大兄皇子です」

中臣鎌足 「皇子と私二人が揃ったと言う事は、もうおわかりでしょうが、かの有名な大化の改新のコンビでございますー」

中大兄皇子 「やっちゃいました中央政権の時代始めちゃいましね」

中臣鎌足 「今元号は、平成ですか？あの時つけた大化ってのがこの国の最初の元号でしてね、ええ。(カメラがパシャパシャ) あーちよつとすいません、写真撮影はNGで！サインもNGで！」

中大兄皇子 「いや、ほんと一躍時の人になっちゃったもんで注目度がすごくて」

入鹿 「(登場して) あれ。あれ。お前、もしかして・・・」

中臣鎌足 「すいませんサインは後で

入鹿 「サインじゃねえわ。オレの顔みろ」

二人 「顔？(二人して蘇我入鹿の足を見る)」

入鹿 「顔に見えるかそれが」

中大兄皇子 「随分足っぽい顔ですねえ」

入鹿 「だからそれ足なんだよ、この顔みろつつつてんだよ。忘れたとは言わせねえぞ、お前に暗殺された蘇我入鹿の顔を！」

中大兄皇子 「忘れました」

入鹿 「言わせちゃったよいとも簡単に、え。皇極天皇の目の前で堂々と

斬りかかってきたろ！」

中臣鎌足 「(急に強気) おい！へんな言いがかりをな！」

入鹿 「!?!」

中臣鎌足 「つけてもいいかな！こっちが！」

入鹿 「ダメに決まってるんだろ。なんで暗殺された上に、へんな言いがかりつけられなきゃいけないんだよ」

中大兄皇子 「いやヒト違いです」

入鹿 「は？ヒト違う事ないだろ、さつき中大兄皇子って」

中大兄皇子 「いえボクは中大兄皇子じゃありません」

入鹿 「じゃあ誰なんだよ」

中大兄皇子 「ボクは、中大兄皇子が即位したあとの、天智天皇です」

入鹿 「だから中大兄皇子と同一人物じゃねえかよ。そして隣には、中臣鎌足だっているし」

中臣鎌足 「私は中臣鎌足じゃありません」

入鹿 「じゃ誰だよ」

中臣鎌足 「私は、奈良、平安、鎌倉時代と長きに渡り続く名門藤原氏の祖、藤原鎌足です」

入鹿 「だからそれ同一人物だよ。中富鎌足が臨終の際もらった冠位が藤原であつて藤原鎌足は中臣鎌足なんだよ」

中大兄皇子 「説明っぽいし、さほどうまくないツツコミ」
二人 「どうもありがとうございます」

入鹿 「嫌みにしか聞こえないけど。だいたい歴史の豆知識ないと伝わらないボケは一切廃除してもらえるかな！」

中臣鎌足 「一切廃除？もしやあなた、自分の邪魔だとわかると、有力な皇位継承者をも廃除してしまうという蘇我入鹿っぽい発言しましたけど、一体、あなた、どこの誰の蘇我入鹿ですか！？」

入鹿 「質問がおかしいよ、蘇我入鹿本人だよ。今全部説明してもらつちやつたけど」

中臣鎌足 「え？あなた誰ですって」

入鹿 「入鹿！」

中臣鎌足 「水族館のショーごころうさまです（二人でお辞儀）」

入鹿 「そっちのイルカに見えるとしたら、お前らの心は相当ピュアだな」

中大兄皇子 「なごり雪、大好きな曲です！」

入鹿 「そっちのイルカでもねえしな！」

中臣鎌足 「イルカ、いるか？」

入鹿 「くだらないよ、さっきから、いるんだよずっと。だいたい入鹿つてのは後世オレを罵って勝手につけたあだ名だろ、そのせいで今の歴史の教科書にも入鹿つて名前定着しちゃつてるみたいだけども。」

中臣鎌足 「あれ、じゃ本当のお名前、何ですか？」

入鹿 「本当の名は、林太郎鞍作（たろうくらつくり）だよ」

中臣鎌足 「・・・もっかい名前いいですか？入鹿のイメージ強すぎて」

入鹿 「もういいよ、入鹿で！とにかく、お前ら二人して、オレの暗殺計画立てたる！」

中大兄皇子 「暗殺？」

中臣鎌足 「計画？」

入鹿 「何で順番で言ったのかなあ今。憶えてるだろ645年。乙巳の変だよ。偽りの儀式仕込んで、偽りの文書、蘇我石川麻呂に読ませやがって」

中臣鎌足 「ちよつと数千年も前なんで記憶が・・・」

入鹿 「急にぼけたふりするんな、あれ最初、蘇我石川麻呂にオレを暗殺させようとしたら。蘇我氏の中でもあいつとは仲良く無かつたからな、

あいつを仲間にして内部から崩壊させようって魂胆だったんだろう（ひそひそしゃべてる二人に）聞けよ、ヒトの話！もうバレバレだったんだよ、あいつ手がプルプル震えてだしたしよ」

中臣鎌足 「そうか、あいつアル中だったか」

入鹿 「アル中の震えじゃねえわ。いざ任務遂行、ってなってビビってたんだわ。それで結局、見るに見かねてお前（中大兄皇子）がその後丸裸のオレを斬り付けたろ」

中大兄皇子 「入鹿さん、全裸でしたっけ！」

入鹿 「刀持ってなかったって意味な。やだわ、儀式の中で全裸は。とにかくお前ら内部の奴まで利用して暗殺したんだろ、オレを！な！」

中臣鎌足 「おい！さつきからずうううと黙って聞いてりゃ」

入鹿 「まあまあ横やり入れてたろ、お前ら」

中臣鎌足 「蘇我氏のヒトを利用して蘇我氏を滅ぼした？あのね、あのちよつと前に、この中大兄皇子さまは蘇我氏の石川麻呂の娘と結婚して蘇我氏とは友好関係だったんですよ、てことはあれは蘇我氏を眩ます政略結婚です！」

入鹿 「やっぱそうじゃねえかよ、政略結婚じゃないって言うかと思っただら」

中臣鎌足 「言つときますが、あの娘を盾にして蘇我石川麻呂をこっちの味方に付けたんです」

入鹿 「もうすっかり開き直ったな」

中臣鎌足 「けど入鹿さん評判悪すぎたでしょ、皇極天皇、女帝だったのいいことに愛人になったり、高い丘の上の屋敷に住んで、そこから天皇見下ろしてたり。」

中大兄皇子 「そう、だから貴方の親父さんである蘇我蝦夷さんでさえ、さすがにどうかなって言ってましたよ」

入鹿 「親父が？何がさすがにどうかかななんだよ」

中大兄皇子 「さすがに入鹿ってネーミングセンスどうかなあって」

入鹿 「だからお前らがつけたんだってどうかかなあって名前！」

中臣鎌足 「（皇子を庇い）それにちよつと前に決定的に反感買う事やらかしちやっただじゃないですか」

入鹿 「なんだよ決定的に反感買うことって？」

中臣鎌足 「ようく考えてみてください。胸に手をあてて、もう片方の手で股間を隠して、お風呂あがりみたいな状態でおく考えてみてくださいよ。」

入鹿 「どうしてもこの恥ずかしいポーズで考えなきゃいけないのか」

中臣鎌足 「入鹿さん、聖徳太子さんの息子暗殺したでしょ？山背大兄王」

入鹿 「オレが山背大兄王を暗殺？そんな証拠があるのか！」

中大兄皇子 「証拠という証拠はないです！」

入鹿 「じゃどうしてそんな強気かオレにはわからん」

中臣鎌足 「いや皇極天皇のもとじゃ、次の皇位後継者候補四人いたでしょ、

最有力候補だった山背大兄王、軽皇子（かるのみこ）。そして、この

中大兄皇子さま、それから蘇我氏の血をひく貴方のいとこ、古人大兄

王。蘇我氏としちや古人大兄王を擁立したかったでしょ？だから邪魔

である最有力後継者の山背大兄王を」

入鹿 「何、じゃあ、俺が山背大兄王を暗殺したから俺を暗殺したの？」

中大兄皇子「だってふつー暗殺したら暗殺おかせしするのって礼儀かなあつて」

入鹿 「お歳暮みたいな言い回だな、暗殺」

中大兄皇子「え、お歳暮なんですか、暗殺って！」

入鹿 「こつちが聞いてるんだよ！だいたいな、オレの悪評流されてるけ

どな、奈良県の入鹿神社ってのがあるのよ、な、そこに俺がご神体と

して奉られてるんだよ。もし本当に悪行ばっかの逆賊だったら、ご神

体として奉られないよ。だろ？オレの力があつたから中国とかの外交

もうまい事やれてたの！オレの政治を恐怖政治なんて書いてる日本

書紀でさえ、俺の政治的手腕だけはすごかったって認めてるからね」

中臣鎌足 「そう言えばそんな事書かれてた」

入鹿 「だろ？」

中臣鎌足 「確かに蘇我入鹿さんは、残忍でイビキがひどくてケツにブツブツ

が尋常じゃなくあつて切つても切つても映えてくる鼻毛の持ち主だ

つたけど、政治的手腕だけはすごかったって」

入鹿 「褒める前のけなし方が尋常じゃねえな。もう泣きそうだわ」

中臣鎌足 「じゃ、涙とともにお帰りください」

入鹿 「帰れるか、あほ。こんなんじゃ全然、納得いかねえよ」

中大兄皇子 「まあ、全然納豆食いにいかなくても」

入鹿 「納豆食いにいくわけじゃねえよ、納得いかねえなって言ったの！

おかしいんだろ色々。どうもくさいニオイがしてんだよ」

中大兄皇子 「納豆から？」

入鹿 「納豆の事は忘れる、何か裏の力が働いてるくささだよ・・・。日本

書紀の記録だっておかしいんだよ。俺は確かに山背大兄王暗殺に加担

したよ、ただオレ単独じゃないんだよ。実際は、軽皇子（かるのみこ）、

巨勢徳太（こせのとこだ）大伴馬甘（おおともうまかい）とか六人

で行った暗殺なの。なのに、オレだけ後世まで悪者として語り継がれ、

他のメンバーは処罰されてないんだよ、おかしいよ絶対」

中臣鎌足 「名前の問題じゃないですかね」

入鹿 「そんな理由！？そんな理由だったら・・・あ今思い出した！日本書紀の編纂に関わってるのってそういや、お前の子孫だよな、藤原のー」

中臣鎌足 「いや藤原紀香じゃないですよ」

入鹿 「わかってるよ藤原不比等だったよな。お前の子孫が編纂してたってことはお前らに関する都合の悪い事はうまいこともみ消せるよな。あれ！なんかオレは今色んな事繋がっちゃったよ。これ、もしかしてお前ら二人の出会いから仕込まれたものだったんじゃないか」

中大兄皇子 「出会いが仕込まれてる？どういう事ですか？」

入鹿 「お前らの出会い、飛鳥寺で蹴鞠してた時だろ？」

中大兄皇子 「そうです、そこでボクの靴が脱げちゃって」

中臣鎌足 「それを拾ったのが私。その時、わたくし中臣鎌足、31歳（皇子をさして）中大兄皇子、19歳。（蘇我入鹿をさして）蘇我入鹿精神年齢4歳」

入鹿 「関係ないだろオレは。その靴を渡した際、こうやって見つめ合って手ー握りあって菊の契りを交わしたらいいな」

中臣鎌足 「菊の契りって（すごい動揺）」

入鹿 「動揺っぷりが尋常じゃねえな。菊ってのはつまりケツの穴の意味だろ。菊の契りを交わしたってのはそういう事だろ」

中臣鎌足 「何よ、あんた！鎌足のカマは、オカマのカマだって言いたいのに！」

入鹿 「急に口調から素が出ちゃってるけど」

中大兄皇子 「僕は、運命の出会いだったんですよ」

入鹿 「運命の出会いをこいつ（鎌足）が装ってたとしたら？靴拾うそのタイミングもずっと鎌足が狙ってたとしたら」

中臣鎌足 「おい、へんな言いがかりをな！（ぐっと近づく）」

入鹿 「!?!」

中臣鎌足 「つけてもいいかな！」

入鹿 「だからダメだったつたろ。そうだよ、そもそも鎌足、オレら蘇我氏と争ってた中臣氏だろ。おまけに中国の兵法の書も丸暗記した秀才だと聞いた。それぐらいの戦略思いつくのわけないよな。実際どうよ皇子さんよ。オレを暗殺しようと思ったのは、自分一人で思いついた事？それとも中臣鎌足と出会って唆されたこと？」

中大兄皇子 「え、何それボクが利用されてたみたいなの・・・」

入鹿 「じゃもう一個質問だ。オレを殺した後、なんでお前（中大兄皇子）

がすぐに即位しなかったんだ？あれからすぐ皇極天皇のポスト空い

たよな？で、俺が擁立したがってた古人大兄皇子は出家。山背大兄王ももういない。となると皇位継承は二人に絞られた。軽皇子と中大兄皇子、誰もがオレを討つたあんたが即位すると思つてた。だけど実際即位したのは軽皇子のほうだ。それはなぜ？」

中大兄皇子「いや、なぜって言われても」

入鹿 「じゃ皇子、もうひとつ質問だ」

中大兄皇子 「怒濤の質問ぜめ！」

入鹿 「こういう事実は知ってたか？この中臣鎌足は、中大兄皇子と出会

う以前から、密かに軽皇子と超仲良しだったって」

中大兄皇子 「超仲良しってどの程度の！（急に必死）」

入鹿 「どの程度仲良しか知りたい？どのくらいかっていうとな」

中臣鎌足 「くくく。・・あつはつは、あーはつはつはつは！」

中大兄皇子 「・・・」

入鹿 「おうおうおう、ようやく本性を現したな」

中臣鎌足 「ベリベリベリ（と顔をめくる）」

入鹿 「ぬあっ！」

中臣鎌足 「化粧水パツク」

入鹿 「お肌ケアしてたの、ずっと！？」

中臣鎌足 「つまり入鹿さんはこうおっしゃりたいのですか？私が予めこういうシナリオを描いてた？皇位後継者の一番有力者だった山背大兄王が邪魔だった。それは中大兄皇子にとつても、蘇我氏とつても、それから私と一番仲良しだった軽皇子にとつてもそうだった。ただ自分たちの手は邪魔者で消すのはリスクーだ。じゃそれをやってのける適任にやらせよう。それで蘇我入鹿に暗殺をあえてさせた。そうすると今度は入鹿が悪者になる、だからこの大義名分をもって今度は蘇我氏を討とう。ただこれも自分の手を汚したくない。だから一番適任の中大兄皇子にさせよう。そして蘇我入鹿暗殺がうまくいったら、中大兄皇子ではなく、超仲良しの軽皇子を天皇にしてさしあげよう。そういうシナリオがあつたとしても言うのか？」

入鹿 「（ひいちゃう）いや、そこまで明確に推測してなかったけど・・・」

中臣鎌足 「しまった！！つい！」

入鹿 「ほら皇子聞きましたか、こいつの本性。皇子が崩御なさる時、こんなやつに藤原の姓と冠位を与えちゃったでしょ。それでそれ以降、数世紀にも渡って、藤原氏が栄えちやっただでしょ？」

中大兄皇子 「ボクは、ボクは・・・（と鎌足から距離を取り出す）」

中臣鎌足 「皇子、あんなやつという言葉信じちゃ」

中大兄皇子 「来ないで！」

入鹿 「はは、お前らの運命の出会いとやらも脆いもんだな」

中臣鎌足 「仕方ない、じゃもう別れよう！」

中大兄皇子 「それはいや！」

入鹿 「でもガッツリ手なずけられてる！」

中臣鎌足 「(抱きしめようとする)」

中大兄皇子 「近づかないで！でもギョツと抱きしめて！」

入鹿 「ツンデレがすごい、しかもその注文に無理がある！」

中臣鎌足 「申し訳ありませんでした皇子。バレてしまった以上もう一緒には

いられません。自らで今まで身にまどっていたものを全て剥がします。

そしてそれを、蘇我入鹿に譲ります！(と何かを渡す) 入鹿さんどう

ぞ受け取ってください」

入鹿 「(何かを受け取って) ようやく降参したか(渡されたものは) な

んだ、これは？藤原氏をしのぐ姓を、オレに与えてくれるってえのか」

中臣鎌足 「いや、化粧水。バックです」

入鹿 「いるか！」